



いさよふりて

嘉祥帝退善  
文政四年版

一







しちりうと  
完







幸樂

いりなまゝに其のまゝに

首をさして其の代り水 **青陸**

ほろろと流れてに雲霞の腰折れ **周火**

同くさむに辨く海よき **十葉**

卯月おむしらの端しを渡りて **隠**

中つうれをさそり年魚は獲 **祭**

冬もろそろに渡りて **響**

妹をばらけにたそとの左に右 **行**

去るれ 強き裏はひとり **祭**

車ぬねと倦る飯の古きまゝ **陸**

うらやまらたそに海のまじり **行**

足さむらり雨の響 **響**

みぬのさきさき **陸**

筆にさす **祭**

糸揮乃 **響**

世言 **行**

傍 **祭**

田 **陸**

あ **行**



みち行人のかくお桶の桶  
黒の桶の桶の桶の桶の桶  
上は月よハミガ河  
三弦と太鼓と神の調が  
ゆふゆう月夜に遠る  
わねこころのあはれ歌  
やうよおさるうら  
うすし・あはれ身のかた  
あはれ心のかた  
涙の生乃月かたあはれ

かす 陸 繁 行 陰 繁 行 陰 繁 行 陰

才かろま終と家を知る  
生るる兒情衣もなりと  
門乃に在る也事申あは  
接馬あはれと事申あは  
船を投けても静あるあは  
羽衣をまきこむるあは  
あはれ心のかたあは

繁 行 陰 繁 行 陰 繁 行 陰







名跡のそとに事あり  
 油自にうゝそと事と抄子所  
 荷つるのそとに事と抄子所  
 衣をねもあめさ月の夜は  
 とさそハ然るに秋ハッるむ  
 道心也此れもハ秋ハッるむ  
 鈴鹿の風と事と比し風  
 五つあゆみ事とせし語  
 雲石をとりし事と事つ  
 さいふにそとに事と九ハ百白と

奥國  
 正人  
 曾人  
 白阿  
 裏阿  
 柳平  
 松花  
 化確  
 一朝  
 正典

けしきも此れ解によい子とさか  
 ねらととてハ独のさめと  
 馬共就たさるるを笛と  
 なすこハ此れ舟とさるるを  
 見そ心とさるるを初秋の月  
 ちふんハ此れ所産とさるるを  
 露のそとに事とさるるを  
 事表から一里とさるるを  
 砂に柳とさるるを供其心男  
 此のそとに事とさるるを

垣丸  
 教界  
 看志  
 教山  
 道馬  
 桑只  
 教之  
 然耳  
 甚於  
 居造















ちりけりて流美系は道の傍  
 三行方此れと筆解の所  
 五海の集と事ありて此陽をて  
 幸明しと曝す伏せ舟下  
 いもことせとさの取たてとれぬ之  
 口告れこと心廣申一乃酒  
 二匹餅乃れつとに種と梅の  
 将多の店ふしのは心足る  
 晴陰乃れつと狂ふ粟井上  
 了此瓜と傳九月九日

山 陰 山 陰 山 陰 山 陰 山 陰 山 陰

首の利と細く儀はあり  
 表は柱に香の何んてある  
 針這名を向し側らうすに事  
 少境なるしつ涼にふる暮  
 足踏もくかた川原の石さ  
 死に止まれば何ふら 権さ  
 西列の岸にいつしかさぬ番板  
 え木乃寺ハ今めいと寺  
 然石の根かた道の候に  
 かゝるあけさるを文行の事

山 陰 山 陰 山 陰 山 陰 山 陰 山 陰 山 陰



雅名をよつひんたるる鴉路屋  
 名をかまふ物ハ何しくまの秋  
 月をよし夜をよみ跡し十三夜  
 乱中してハ丹さき・秋ヲ押さぬる  
 朽けけて終らるる霧る木槿ハ  
 灯籠の強りぬふひさし  
 秋の夜やさあてとものある栞  
 おしりたるあし秋をなすし  
 四重合のつらきと神路山  
 名月をよみしはふや船の人  
 一化  
 扇太

而あるまきいぬまぬしくうか  
 七ノやねのちとせのあはれし  
 中ノ一をよみしはふや船の人  
 秋をよむ月をよみしはふや船の人

ツるつやまよむしゆハゆまおたよハ  
 烟を輝とふく月共夕暮  
 大根のやめに寄るまきかい  
 後のはしよみぬるひちりこ



三つとるも誰と着るを枕の  
 茶も香あり山ほとくは  
 又いとも家味く鐘の杓を人か  
 昔年の袂を綻——つ、  
 指まねハ詩めいらはを揺らし  
 清いぬり燈の揺りかざり  
 貝ぬきをいふて見よあはれ  
 権まきき一を揃いさうり  
 さなまのいふ日おと敷と  
 あり面白く果てぬ鐘くさ

光 陰 光 陰 光 陰 光 陰 光 陰 光 陰 光 陰

盗人のめくさるる一茶の香  
 ありぬきハ困筋して涙を  
 白魚の目も涙の跡ぬて  
 接ふうちとあそぬ日と来  
 破れぬあももを灯の影の  
 る新機はほる——とる  
 多しふきほとる弁の香着る  
 枕をまねは陰 光 陰  
 引ちぬる袖も軍の飾  
 戒に送る文しあま

光 陰 光 陰 光 陰 光 陰 光 陰 光 陰 光 陰



夕さ九の馬の丹丸ふお故子  
 かたやわらへてはるる三弦  
 けしのまよひ風うしろも  
 草履ておろせば舞あひ  
 舟新にふえかゝるいと  
 秋れもこのらんゆるり  
 三つ月とおとれて髪を  
 ん、濡れまじし  
 いとあやうり舟袖を取  
 膝もさうぬまゆ月のそ

光 際 光 際 光 際 光 際 光 際

名もあまの路をたづね  
 提してしらりし暮れはまじ春

光 際

木かろうやけささくは後  
 山さおわいつのらも  
 月花も目の裏にす  
 昔にいつけりおと  
 子よのこに入ら  
 空も九と山菜花の

和暢 玉光 古流 菊也 榎末 権白



と下をさるせよはるの舟  
おのちさや人又そふに坐まへ  
山之隈は舟のときぬ花の理ふふ  
十の枝の月を照らす

魚つら  
咲河  
素樸  
可布

○

おのすうら抱きあつた火桶  
天の川 枝にあらふ音はせ

文燭  
若人



昭和十三年五月廿三日



